27

『切紙』所載の脈法について

中川　俊之
日本鍼灸研究会

京都大学付属図書館所蔵の曲直瀬道三著『切紙』（キ・159）は，2巻2冊（上冊49葉，下冊45葉）の漢文体の医書である．天正9年（1581）に成り，寛永20年（1643）に刊行されている．内容は「五十七箇条」以下41状の切紙で構成され，各状は冒頭に状番号と題名が書かれている．末尾に識語と刊記が附されている．各切紙の成書年代は，天文7年（1538）1状，天文11年（1542）1状，永禄九年（1566）1状，永禄十九年（1567）1状，元亀二年（1571）13状，元亀四年（1573）2状，天正九年（1581）2状となっており，元亀二年（1571）の13状が突出している．

『切紙』所載の脈法には，『丹渓脈訣』『脈訣刊誤』『医学指南』『脈経』『医学正伝』『明医雑著』『王叔和脈訣』『丹渓心法』『格致余論』『十書』『素問』三部九候論などが引用されている．引用書の種類は『診切枢要』と類似する．脈法の内容は，脈診の基礎（男女，陰陽，神，栄衛，五蔵，経脈など），脈診部位（左右寸関尺，気口人迎），脈状（七表八裏九道，26脈状など），脈證から構成されている．診脈部位は，冒頭の「一・五十七箇条」の識語に「病證を弁知して即ち左右三部を診察す」とあり，末尾の「四十一・脈訣刊誤撮要」の識語に「上中下寸関尺の三部，五蔵六府の脈象を見る……」とあるように，左右寸関尺を選択する．

脈状は浮沈遅数を重要視し，あわせて二十四脈状の類に及ぶ．

浮沈遅数については，「二十六・摩訶覚（脈治之大悟）」で，虚実，数疾と遅緩，浮沈の脈状を挙げ，識語で「右，三箇の弁例は誠に診候の奥義にして，深く之を明らかにすれば則ち，七表八裏九道の煩を察せざると雖も，頗る虚実寒熱を弁じ，邪由の浅深を知る」と述べている．また「四十一・診切博約之次第」では，『三因極一病證方論』『脈訣理玄秘要』に基づき，浮沈遅数を24脈状の中心脈状とし，浮沈遅数に有力，無力を加え，風湿寒熱（外邪），虚実冷燥（内邪）の各脈證を設定する．道三の『診切枢要』診切博約，『医学指南篇』四脈為祖，『医家要語集』四脈力弁，『診脈口伝集』四脈力説，『脈約簡略』四脈ヲ為祖にも同様の記載がある．

『切紙』所載の24脈状系統の脈状には，七表八裏九道脈と相対脈状（浮沈，遅数など）の2種類がある．さらに相対脈状には，典拠不明の24種の相対脈状と，『診脈口伝集』『診切枢要』にも見られる26種の相対脈状がある．七表八裏九道脈は，「二・診候薬註一紙之約術」に記載され，脈状の種類は，『王叔和脈訣』の通りであるが，配列と大部分の脈状の説明は典拠不明である．相対脈状は，先ず「三・脈対分別之捷径（古今二途）」に24種の脈状が相対（浮沈，虚実など）の形式で記載されている．これは『脈経』を初め歴代の脈状記載に見当たらず，『王叔和脈訣』の七表八裏九道脈を相対に組み替えた独自の記載と考えられる．「四・弁脈体名状」では，『丹渓脈訣』からの引用として26種の脈状と気口人迎の病證の解説がある．『三因極一病證方論』巻一・総論脈式の記載［『王叔和脈訣』の七表八裏九道脈＋数脈，散脈］が基になっている．

道三の脈法は，本書以外にも，『類證弁異全九集』（1544）巻之一，『診切枢要』（1566），『医学指南篇』（1571），『脈論』（1571?），『医家要語集』（1572）察脈要語，『診脈口伝集』（1577），『老師雑話記』（1577），『脈訳簡略』等に述べられている．道三の脈法は，前期（『類證弁異全九集』巻一）と後期（『診切枢要』以降）では違いがあるが，1538年～81年の条文を含む『切紙』は，道三の脈法の変遷を窺う資料として貴重である．